

タイトル	「縮小社会」における地域社会の持続可能な発展に関する一考察（その3）：「北海道公民館史」を手がかりに
著者	内田，和浩； UCHIDA, Kazuhiro
引用	開発論集(91)： 155-177
発行日	2013-03-14

「縮小社会」における地域社会の持続可能な 発展に関する一考察（その3） ～「北海道公民館史」を手がかりに～

内 田 和 浩*

はじめに

本稿は、拙稿『縮小社会』における地域社会の持続可能な発展に関する一考察(その2)～『北海道公民館史』を手がかりに～(北海学園大学開発研究所『開発論集』第89号, 2012.3)の続編である。すでに(その1)では, 1, はじめに 2, 「北海道公民館史」の見取り図 3, ケーススタディ1(羽幌町)を収録し, (その2)では4, ケーススタディ2(士別市)のうち(1)士別市の概要, (2)現在の士別市公民館体制, (3)昭和の大合併前の各町村の公民館の変遷(～昭和29年6月まで), (4)士別市としての公民館の変遷(昭和29年7月～平成17年8月まで), (5)旧・朝日町の公民館の変遷とその後の士別市公民館(平成17年9月～現在まで), (6)地域社会の変貌と分館活動, を収録しているが, (その3)として, (7)公民館活動を支えた人々とその思い, (8)残された課題, からはじめる。

なお, 本稿では士別市の元中央公民館長であったYさんの「ライフヒストリーから見た公民館史」として, (7)公民館活動を支えた人々とその思い, を整理・分析する。Yさんへの聞き取り調査は, 平成21(2009)年3月10日に士別市中央公民館(士別市市民文化センター)会議室にて実施したものである。聞き取り調査は, まず事前にYさんの生活史を年表に整理し, さらにYさんが1990年8月23日～11月13日まで地元の北都新聞に33回にわたって連載した「わが公民館人生に悔い無し」のトピックスを引用しながら, 筆者が聞き手としてYさんに質問し, Yさんがそれに答えるという形で行い, それをテープ起こしして整理したものである。

4, ケーススタディ2(士別市)

(7) 公民館活動を支えた人々とその思い～ライフヒストリーから見た公民館史～

①Yさんのライフヒストリーと士別市の公民館史

巻末の表9は, Yさんと士別市公民館のあゆみを年表として整理したものである。

Yさんは, 昭和6(1931)年4月1日に北海道上川管内剣淵村で生まれ, 昭和18(1943)年

* (うちだ かずひろ) 開発研究所研究員, 北海学園大学経済学部教授

に士別市（旧・温根別村）へ転居した。もともと体が弱く、学校卒業後は何もせず家に居たという。

a) 前史—温根別村役場に入る ～昭和 23 (1948) 年

そんな Y さんが、昭和 22 (1947) 年 3 月 4 日から温根別郵便局勤務することになり、昭和 23 (1948) 年 11 月 1 日からは温根別村役場勤務（農林統計係）となった。

この経緯を Y さんは、以下のように語っている。

（聞き手） 地元の郵便局に勤めてから役場に入られたわけですが。

（Y さん）（前略）そんな時に、たまたま同級生の女の子が二人郵便局で交換手をやっていた。その一人の兄貴が、温根別の役場の総務主任で偉かった。それが、「今、人がいなくて困っている。それなら Y さんはどうだろう。いつまでも保険や郵便配達やっけていしょうがないだろう。」と。当時、病気のお袋がいたが、自分が留守の時にその主任が家に来て「人が足りない。来いとは言わないが、来たかったら来なさい」と、言い残していった。すぐその家に行ったら、「明日、助役に会ってみるか」という話になった。助役に会ったら「今日からその辺で仕事して行け」と言われ、「冗談じゃないまだ郵便局に勤めている」というと、「では 1 日から来い」ということになった。10 月の 26、7 日の話です。（中略）郵便局長の家に行き、「お世話になり申し訳ないが、役場に変わらせて欲しい」とお願いした。そうしたら、局長から「そうだな、申し訳ないことをした。Y は体が悪いから気の向くままに集金をさせたり、村内の配達、余ったところで自転車の修理でもさせればいいということで雇った。君の体のことを考えたら悪かった」と言われた。役場での最初の仕事は、農林統計係というところで、肥料配給公団からくる肥料の割当表、窒素リン酸カリを何グラムの単位まで計算するのをやった。あの頃は小さい村とは言え、農家は 600 戸ほどあり、台帳もかなりの厚さがあった。それを作った。

b) 温根別村公民館の設置 昭和 23 (1948) 年

温根別村では、昭和 23 (1948) 年 7 月 1 日に温根別村公民館が温根別村役場内に設置され、9 月 11 日に開館式が行われた。初代館長には、温根別中学校の大串利平校長が就任した。

その頃のことを、Y さんは以下のように語っている。

「昭和 23 年 7 月 1 日に、公民館の建物が出来た。4 月に役場に公民館を設置し、建物が 7 月 1 日にできた。これが公民館の写真です。昭和 23 年 9 月の写真です。看板は中学校だが、2 階建てで下が公民館として使って、2 階を中学校が使った。2 階の小さい部屋が公民館の事務室。2 階に教室が 2 つ、1 階にも教室が 2 つ。写真に写っていないが、右側の門の看板が公民館だった。翌 24 年に新しく中学校の建物ができた。翌 25 年には消防署が公民館の 1 階に入った。昭和 25 年に新しい役場庁舎が出来て、役場の二階のホールも公民館事業として使用した」¹⁾。「温

1) 拙稿『『縮小社会』における地域社会の持続可能な発展に関する一考察（その 2）～『北海道公民館史』を手がかりに～』（北海道学術大学開発研究所『開発論集』第 89 号、2012.3）p 123 を再掲。

根別青年学校卒の先輩が、戦前代用教員として温根別小学校に勤務した。その人が、戦争から帰ってきて、最初富良野の学校にいたが、その後温根別の小学校へ来ていた。その後村役場に入ったが、この人が公民館を作れと言う運動を起こした。『中学校を建てるより公民館を建てるのが進駐軍の命令です』と、村長等を説得した²⁾と。

また、「中学校が新築されるまでは公民館で中学の授業が行われていたが、公民館の事業を昼間行った時は、中学生は夏場、青空教室となる。『試験を控えてかわいそうだが、公民館で行事があれば仕方がないもな〜』。よく先生方にこぼされたものである」(1990年8月25日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」2より)とも記している。

c) 温根別村青年団のこと 昭和22(1947)年～昭和27(1952)年頃

温根別村の青年団は戦後直後に復活し、スキー大会などを実施した温根別体育会の中核を担い、その後公民館活動の中心的担い手になっていった。

そのことについて、Yさんは以下のように語っている。

(聞き手) Yさんがまだ役場に入ってなかった22年ごろ、郵便局にいた頃には、青年団活動には参加していましたか。いつ頃どういう経緯で入ったのですか。

(Yさん) 青年団は農家が主力ですが、町の間人も入れということで、昭和22年に僕が入り、初期の公民館活動にも参加していた。初代青年団長はすごい人だったが、どういう経過かわからないが24年ごろに青年団が解散してしまった。そこで我々が新生青年会を発足させた。それから部落のあちこちで青年団ができるようになった。その時、連合青年団から解散したが青年活動として残っていたのが白山地区だった。初代の新生青年会の会長は農業改良普及員の人がなったが、酒に弱かったので、自分があとを引き継いだ。すぐに温根別で模擬国会というのをやった。役場の職員は勉強しとらんとやられた。

(聞き手) それはいつ頃ですか。

(Yさん) 26年です。

(聞き手) 確認ですが、22年の3月に郵便局に入って青年団に入った。23年10月に役場に入るわけですが、そのあと一度青年団が解散し、それをもう一度立て直して連合青年団の団長になったのですか。

(Yさん) いえ、新生青年会の会長です。連合のほうはその頃、農協の青年部がぼつぼつ台頭してくる時代でした。農協の職員でした。

(聞き手) それは24年ごろですね。自ら公民館の兼務担当になったのですか。当時の公民館長から青年団をやっているから手伝えということでは言われたのですか？

(Yさん) そうかもしれませんね。

(聞き手) 役場の統計係兼教育係ということですね。それから教育委員会制度ができてからも、

2) 2009年1月26日、温根別公民館でのYさんらへの聞き取り調査から。

兼任されたんですね。

(Yさん) 27年くらいから兼務できないですよ。教育委員会の社会教育関係が忙しくて、青年会も会長もできなくなった。新生青年会は最後まで残っていましたが。

d) 温根別村公民館での活動 昭和24(1949)年～昭和29(1954)年

上記の発言のように、Yさんは昭和24(1948)年4月1日から温根別村公民館を兼務することになった。そして、昭和27(1952)年11月1日、公選による温根別村教育委員会が発足し、公民館は教育委員会所管の社会教育施設となったのだった。

温根別村公民館での仕事について、Yさんは以下のように記している。

うたって踊って、話せて書いて、理論実践偏らず、映写操作に自動車免許、年中無休で(極めて薄給)、愚痴を言わず——この言葉は、戦後公民館活動に携わった人間は、みんな覚えている。自動車は30年代後半に市町村に入った。

私が昭和24年春、温根別公民館嘱託書記を拝命した頃は、役場の出張で公用車使用とは自転車の事であり、18名の役場吏員に対して2台であった。主に徴税目的であったが、時折使わせていただいた。

CIE(連合国軍最高司令部民間情報教育局)から日本人の民主教育や自由主義の教育のために貸与されたナトコというメーカーの映写機に、CIEフィルムを掛けて上映するのである。道内には100台が貸与されたが、一ヶ所は役場とともに焼失し、99台が動いていた。士別地方7か町村の和寒、剣淵、温根別、士別、上士別、多寄、朝日で2台が貸与になり、1台に約月20日以上上映しなければならぬ。何せ、占領政策の一環であるからして何を置いても実践しなければならない。その映画が1本10分～20分位のものであるから大変である。邦画の同時上映は許されぬ。面白くないと言えば、教育とは面白いものではないとお叱りを受ける始末で、止む得ずスライドや紙芝居、時には講演等も入れる。(中略) CIE映画によって、我々が刮目したことは確かであり、映画会が終わって有志が集まりフィルムフォーラムの中で明日を夢見て語り合ってきた。(後略)

(1990年8月23日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」1より)

そのころの公民館活動について、Yさんは以下のように語っている。

(聞き手) この時代にYさんの社会教育というものの考え方というものが固まった気がしますが、どのようなものだったのでしょうか。

(Yさん) 米軍が出している書物で日本語訳の『民主主義と自由主義』という本が根幹にありました。それから文部省の通達。それで公民館とはすごいものだ。それでナトコ映画を持って歩くときに、文部省の「公民館を建てましょう」というスライドも持って歩き、マイクロフォンで読み上げながらもう一方の手でレコードを回し、音楽を掛けながらスライドを上映した。

(聞き手) 映写機2台を持ち歩き、それを月に何回か使わなければならないという時代は、27年か29年ぐらいですか。

（Yさん） 24年からは温根別村だけ歩いていました。月に20日やりました。

（聞き手） それは24年からいつまで続けましたか。

（Yさん） 26年まででした。CIE映画からアメリカ大使館文化交流のUSIS映画に変わった。

（聞き手） 27年以降はどこで、小学校ですか。分館ですか。

（Yさん） 主に学校です。あの頃は何百人も来ますから公民館は狭いので主に小学校の体育館でした。電気のない学校が3校ありまして、発電機も持ち、馬糞や馬車に乗って大変でした。温根別役場が合併しても車がなかった。合併して車があったのが多寄、土別でトラックでした。4か町村で2台しかなかった。あとは農協に車を頼んでいろいろ運んでもらっていました。学校に映画に行ったら校長先生が接待してくれるわけです。小さな学校は放送器具もないので運動会に合わせて映画を持っていった。マイクを使えるので喜ばれました。充電ですから朝から夜中まで発動機を動かしていた。農家の人から発動機を直してくれと頼まれたこともあった。

e) 合併直後の士別市公民館 昭和29（1954）年7月～昭和34（1959）年頃

昭和29（1954）年7月1日、士別町・上士別村・多寄村・温根別村の1町3か村が合併し、士別市（旧・士別市）が誕生した。これに伴い士別市公民館が誕生し、一中央分館（士別町公民館）・上士別中央分館（上士別村公民館）・多寄中央分館（多寄村公民館）・温根別中央分館（温根別村公民館）となった。Yさんも合併した士別市役所の職員となり、士別市教育委員会社会教育係（視聴覚ライブラリー担当）へ異動したのだった。

この経緯をYさんは、以下のように記している。

「対等合併をする事になったので希望を取りまとめているが、君はどこへ行きたいか」というのである。私は27年に教育委員会が出来てからは、村の統計係と教委事務局の社会教育係の併任で、辞令なしの公民館担当であったので、「併任や兼務はいやだから、教育委員会関係へ行きたい」「温根別は支所になるので教育委員会は何も残らん」「一にも二にも教育委員会関係にしてほしい」。

（1990年8月28日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」3より）

さらに、士別市教育委員会社会教育係での勤務については、以下のように記している。

合併になり希望通り教育委員会事務局の社会教育係を命ぜられたが、公会堂の1室に公民館事務室の中に社会教育係も入った。少人数なので、私は公民館の経理等をやりなさい、住民の対応も新しい土地なのだからと親心で言われたが、かいかもくわからずに映写機の整備等を行っていたところ、館長が市当局とかけ合って合併祝賀事業が中央集権的になりがちなので、市内くまなく祝賀会を盛り上げるためには巡回映画がよいということになった。（中略）フィルムを借り受け市内を巡回した。当時は学校が40校、遠隔地にあっては、公区の会館まで回ると45日間必要とした。

（1990年8月30日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」4より）

また、当時の士別市教育委員会や公民館について、Yさんは以下のように語っている。

(聞き手) (前略) その当時、社会教育係はどこにあったのですか。

(Yさん) 公民館(中央分館)の中に一緒にありました。係長は……三郎さんという方で10年先輩で、直接アメリカ軍からなんとかの指導を受けた人で、公民館の職員でいたが、合併と同時に社会教育係長になった。公民館で僕は会計をやれと言われた。社会教育係は2人、公民館は2人。放送担当があったが女性2人が一日置きに勤務した。合併と同時に新聞社に勤めていた人が採用になった。

(聞き手) それまで公民館は2人ぐらいだったのですか。

(Yさん) 合併してから梅沢という館長がすごい人でした。教育委員会の人全部兼務してしまって。教育長は校長あがりの広田さんという人でよかった。僕はとてもかわいがられた。きかないひとなのかかわいがられるので、皆にうらまれたりしたが。梅沢さんは37年まで館長をやっていた。

(聞き手) 梅沢さんまでは地域の人で、役場の職員ではなく、嘱託の職員ですね。

(Yさん) 嘱託といっても収入役の次くらいの給料をもらってましたね。

(聞き手) 町の四役というかんじですね。そのあとは木村さんという人が教育長と兼務して、荒木さんから専任になった。梅沢さんの時代までは公民館というのは特殊な存在ですよ。

(Yさん) 移動公民館で保健所等と一緒にやった学習会の講師のトップは梅沢さんでした。話がともうまかった。

(聞き手) 公民館にいながらも教育委員会社会教育係だから上司ではなかったのですね。同じところにはいたわけですね。

(Yさん) 29年に合併して30年の春までは同じところにいた。30年の春に営林署の跡に教育委員会が引越した。福祉事務所に。その時に視聴覚教室を作ってもらった。

(聞き手) それで視聴覚ライブラリーの担当ということですね。

(Yさん) 1市3町からお金を集めて。1か月に1回各学校を巡回で回した。

上記のように、昭和30(1955)年4月1日、営林署跡に士別市教育委員会が引っ越し、Yさんもここに移っていった。

昭和32(1957)年4月1日には、士別市公民館は地区館体制となり、各地区館に専任館長を置き、士別市中央公民館・士別市上士別公民館・士別市多寄公民館・士別市温根別公民館となった。

また、Yさんは昭和33(1958)年4月1日に視聴覚ライブラリー担当として士別市図書館に異動となった。実は、これはそれまでの公民館図書室と視聴覚ライブラリーが一体化して、士別市図書館となったのである。

そして、視聴覚ライブラリー担当時代の仕事について、Yさんは以下のように記している。

「縮小社会」における地域社会の持続可能な発展に関する一考察（その3）

（前略）実行出来たのが移動公民館である。ナトコは重い。それに映画会社が喜ばない。国産の映写機をやっと一台購入できたので、馬そりで迎えに来てもらい、保健所、普及所の協力を得ながら、中に館長の講話も取り入れ、昼は子ども達にゲームや映画、夜は大人達に講演や映画で三ヶ月程かかったが、おかげさまで市内をくまなく知る事が出来た。

（1990年8月30日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」4より）

また、この間のことをYさんは以下のように語っている。

（聞き手）図書館を含めて34年までは教育委員会で視聴覚の関係でいたわけですね。視聴覚はご自分の中では公民館活動の延長のようなイメージでしたか。

（Yさん）よく梅沢館長がこぼしてました。Y君がいてやってくれているけれど、公民館から聴診器もとったり、レントゲンをとったりしてなにが公民館ができる、と。

（聞き手）その時公民館は何をしていたのですか。少なくとも温根別公民館では保健婦さんと地域を回って映画やスライドを観たり、講話を聞きながら学習を組織するという地域の社会教育活動を支援していたんですね。士別市に合併して視聴覚ライブラリーが教育委員会の社会教育係にきて、視聴覚ライブラリーを担当するとフィルムを持って同じように学校や地域を回って指導したり、それを使った社会教育を推進したんですね。活動としては公民館とほとんど変わらないわけですか。

（Yさん）どんどん講習会をやりまして、青年たちが免許を取ってくれたので、映写機を貸し出して僕は整備係になったかんじです。

（聞き手）回っていく必要がなくなっていったんですね。図書館では司書の仕事をしていたわけではないですね。フィルムのほうをやっていたんですね。

（Yさん）公民館の仕事が社会教育係がかなりやっていたという感じがあります。教育委員会主催で青年団体研修とか。公民館も同意しますけれど。会場がないから今体育館が建っているところにあった士別中学校でやりました。和室で研修会をやった。レコードコンサートをやっても誰も来てくれないというので、しょうがない、自分の好きな曲だけ自分で解説したりした。

f) 税務課・市民課時代 昭和34（1959）年4月～昭和41（1966）年3月

Yさんは、昭和34（1959）年4月1日から士別市役所税務課、そして昭和38（1963）年4月1日から市民課勤務となっている。

この時代について、Yさんは以下のように語っている。

（聞き手）税務課から市民課にいた時代は社会教育や公民館とは関係なかったのか。

（Yさん）友人に話をさせて作ったスライドを持って納税普及映画会ということで町の中の学校を全部回った。スライドの最初はモノクロであとからカラーで作った。

（聞き手）私的なことで何かやっていましたか。

（Yさん）昭和39年市民課にいた時、ボランティアサークルに入っていて、（道立の）青年の

家で北海道社会福祉協議会の初めての研修をやった。初代は帯広の福祉のOさんが会長をやり、翌年富良野のKさんがなり、つぶれそうになり「Yさんやってくれ」と言われて一年間全道の会長をやった。北海道青年ボランティア連盟は旭川で解散し、今は地域ボランティアに変わった。

(聞き手) 研修は社会福祉協議会から声がかかり、青年たちを指導してくれということだったのですか。

(Yさん) 地域リーダー養成講座だった。

(聞き手) そこにかつて青年団とかで知っている人がいたのですね。

(Yさん) 指導者の中に札幌にあるユースホステルを買い上げたTさんがいて、「Yちゃん、しばらくだな」などと言われた。

(聞き手) それがあったから、その後青年の家や児童館に行った(異動になった)のですね。社会教育を専門にしようとしていたわけではないので、そのまま市長部局にいてもおかしくないのに、社会教育に戻ったのはボランティアのリーダー講習をしたからでしょうか。39年から始めたボランティアの全道の会長をやったのは42年ですね。解散したのはいつですか。

(Yさん) 退職してからです。

g) 児童館・つくも青年の家 昭和41(1966)年～昭和44(1969)年頃

その後、Yさんは昭和41(1966)年4月1日に福祉事務所に異動したが、同じ年の12月に新しく12月25日に開館した児童館に指導員として異動した。そして、昭和43(1968)年5月21日には、やはり新しく同年10月に開館するつくも青年の家に異動している。

この頃のことを、Yさんは以下のように語っている。

(聞き手) では、ボランティア活動中心の時に児童館開館の話がきたんですか。前任者がうまくいかなかったからですか。

(Yさん) 管内で初めて作ることになり、行くことになったので前任者はいない。12月25日開館なので、子どもたちに何か作ってやろうということで、電球20個使ってプラスを作った。十字架ではない。児童厚生委員の旭川中学校の先生だった女性が家を造るということで、窓を作り中に電球をつけてやった。子どもたちに「クリスマスとはなにか知っているか。本当は古代の人たちは太陽が生まれ変わった、ということでお祝いをしていた。そこにたまたまキリストが入ってきて、それにくっつけるようになった。」という話をして録音もしていた。あとで民生委員協議会の中でお寺のお坊さんから「今の子どもに宗教教育をするのはすばらしい。どうぞ日本にはお釈迦様の日があることをお忘れなく」と言われた。そこで、「クリスマスパーティーではないですよ。クリスマスの集いです」と言い、録音を聞かせたら何も言わなくなった。3月になりひなまつりだが金がない。後藤という先生が紙雛で5段のものを作った。青年会議所の人もいろいろ持ってきてくれた。子どもたちに「紙雛変だと思いませんか？」と聞くと笑っている。「本当はお雛様を紙で作って川に流して健康をお祈りしたんですよ。」という話をした。

（中略）他に七夕ビックキャンプや春の一日散策をやった。春の一日散策では5人ぐらい倒れてしまったこともある。

（聞き手）児童館は41年ですね。

（Yさん）そうです。やっぱり公民館にいたことが役に立った。散策で5人倒れたのは母親が飲み屋にいているから朝飯を食べさせていなかった。七夕ビックキャンプでは提灯を作らせた。不要のハガキ3枚で作れるので、ところどころくり抜いて500個作った。それだけではさみしいので1発100円の打ち上げ花火を100本買って壁に打ち付けた。打ち上げには警察官が手伝ってくれ見事だった。それにポプラという人形劇グループが2時間ほどやってくれた。今年退職したSという人が高校を卒業したばかりでよく児童館に手伝いに来ていて、その人にも飾り物の中に入れてもらったりした。

（聞き手）児童館でやったことは、映写などライブラリーの関係でやってきたこととボランティアでやってきたことを実現したわけですね。

（Yさん）社会教育主事が来て「公民館的活動をやりなさい」と言いに来たので、「やっているでしょう」と言った。

（聞き手）児童館の場所はどこにあったのですか。今もありますか。

（Yさん）曙児童館は今もあります。最初にできてあと3カ所ぐらいあります。

（聞き手）当時はこの一カ所だけですね。

（Yさん）上川管内で一カ所だけです。

（聞き手）青年の家には自分の希望ではなく、突然の異動でしたね。

（Yさん）辞令をもらった時の市長の顔を思い出します。児童館をやっていて新聞にも出たりしたのに。市長が小さな声で「教育委員会に行ってくれ」と言う。聞こえないふりをしていたら「今、知事から金をもらって青年の家を建てさせている。そこに行って準備をしてくれ」と。そこで教育委員会に行った。教育長から「市では青年の家らしきものを建てているらしいけれど、教育委員会では関知しないんだ」と言われた。「そこいらで遊んでいてくれ」と言われ、そこから喧嘩して1年で異動した。青年の家はそこから始まり、道内にない施設を作ったりした。

（聞き手）市長さんは市で青年の家を作ることを決めていたのに、所管である教育委員会は所管するつもりはなかった。自分たちが欲しいわけではなかったのに、なぜそんなものを勝手に持ってくるのだ、という感じだったのか。道ではお金が付き、作ることにしていたので担当者が必要だったのですね。

（Yさん）僕が行った時には建物の外観はできていて、中をやっている最中だった。

（聞き手）もう建築が始まっていたのに教育委員会の所管になってなかった。市のほうで作っていたのですか。

（Yさん）準備をせいと言うから来たのに、議員もお前が来るかどうかわからないぞと言われた。所長室と事務室の間に「ドアがないとは何事だ」と、出来上がったものを作り替えさせたりした。

(聞き手) 先輩が準備していたというのは。

(Yさん) 僕の先輩で合併した時に係長だった人でとてもいい人でした。教育委員会はYを嫌いでその人にやってもらいたかった。彼は税務課にいたけれど、教育委員会に言われて準備をしていた。

(聞き手) でも、市長はYさんに辞令を出されたんですね。

(Yさん) 教育委員会はおもしろくない。先輩もいやだったでしょう。

(聞き手) その方はどこに異動されたのですか。

(Yさん) 税務課にいて教育委員会から言われて準備をしていた。その後児童館にいきました。当時僕は市長に信用もあり、かわいがられていました。選挙で反対してからブツ飛ばされたけど。

(聞き手) 係長としてつくも青年の家に行かれましたが、所長はどういう人がなられたのですか。

(Yさん) 教育長が兼務でした。ほとんど来ないで僕にまかせっきりでしたので、たまに講演に呼んでやった。

(聞き手) つくも青年の家では係長以下の職員は何人でしたか。

(Yさん) 8人くれと言ったら教育長は2人か3人でいいだろうと言う。食事も提供するのに冗談じゃない。臨時だった財政のベテランの女性が来てくれて経理を一切やってくれた。それで僕と3人。他に臨時でいたボイラーマンを住まわせて本採用にして、厨房に嘱託の栄養士と調理師を2人。それだけで運営しました。

(聞き手) 次の年から派遣の社教主事が入ったのですか。

(Yさん) 次の年には公民館長だった荒木さんが専任の所長として入り、社教主事も入った。

(聞き手) 今より多いですね。

(Yさん) 今も8人で経営しています。嘱託職員が多いですが。

(聞き手) 所長さんは市の職員ですか。

(Yさん) そうです

(聞き手) 青年の家は公民館や児童館でやってきたことの集大成のようですが、何が一番プラスされたことですか。

(Yさん) 変わったなと思うのは、農民大学というのがあった。(中略)青年の家で農民大学をやるということになった。

(聞き手) 農民大学というのは、定期的に行っていたのですか。

(Yさん) 年に1回2週間です。青年の家ができた年だから、食堂もある、談話室もある、所長室も貸すよ、どこでも使っていいよと。

(聞き手) それから毎年つくもでやるようになったんですね。

(Yさん) 今は農民大学はなくなりましたが。

h) 昭和40年代の士別市中央公民館 昭和41（1966）年6月～昭和46（1971）年頃

一方、昭和41（1966）年6月30日に士別市中央公民館が新築され、図書館併設として開館した。Yさんも、昭和44（1969）年8月1日付で係長として中央公民館に異動したのである。

異動直後の中央公民館について、Yさんは以下のように記している。

公民館に配置になって、あまりの惨状に驚いた。視聴覚機材がすべて破損し、使えるものは、スライド映写機とプレーヤー付きのアンプのみであった。ナトコは道へ返したというのである。それから2ヶ月程かけ、古い教具を修理しステレオ受信も出来るようになり、現図書館の事務室隣に設置したりした。

（1990年10月4日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」16より）

そして、そのころの士別市中央公民館について、さらに以下のように記している。

公民館学級は、いつも満員であったが2階に2室と館長室、さらに三畳間のみである。大講義室は、図書館の閲覧室であり、1階の資料室は郷土資料室となっており、講座には使用不能である。時折、市民会館を使用するが、これが使用料がかかる。

年間予算から館の管理費（図書館の使用分）を除くと事業費に使える費用は誠に些少である。役所には、政策費と経常経費とがあり、政策と認められるものは経常経費には計上されない。これが役所では難解なところなのであるが、公民館の体質を未だに理解出来ないらしく、経常経費を一般役所の事務関係費用同様に査定され、これは財政に委ねられているから、余計にやりづらい。公民館は、政策を乗り越え、住民が学習したい時にいつでも学級等が開かれる経費を持っている必要のあるところである。当時の館長が、時折、こぼしておられた。館の管理費を先取りされるから、事業にさっぱり使えない、と。しかしいくら公民館費に油代が予算化されていないとは言え、寒くするのも限度があるのである。

（1990年10月5日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」17より）

このころについて、Yさんは以下のように語っている。

（聞き手）（前略）昭和44年8月1日に中央公民館の係長で戻られた。（中略）業務兼庶務係長として2年いたわけですが、この時にはどのようなことをされたんですか。

（Yさん） 経営は館長の決済もらわんといけないですから。係長から直接教育委員会の決済をもらって。公民館補助でもらって建てた建物だけけど、それを図書館。市民はみんな図書館だと思っていた。

（聞き手）（前略）この間、Sさん（別の元中央公民館長）にお話を聞いた時に、公民館として建てたのに図書館に奪われてしまったというような印象があると聞いたのですが。それも含めて士別の公民館はどうして独立した施設として整備しなかったのか。

（Yさん） 条例設定だけはきちんとしていたんだけど。Wさん（道公協の当時の会長）に「Yさん、士別は表彰してもいいんだけどやっぱり館がないのは弱いよね」とよく言われましたよ。

ところが僕がいる頃には閲覧室という看板は掲げさせなかった。大会議室とって、そこで晩の学生会や音楽鑑賞会をやった。部屋の半分に本が置いてあって、半分は閲覧室になっていた。公民館長の豊田さんがお話し好きな人で僕の出番がないと言われるものだから、何かやるたびに館長の話を入れました。

(聞き手) Sさんに聞いた話では、昭和30年代、建物ができる前までは映写機を持って外や婦人会の集まりに行きそこで一緒に議論した。施設がなくても職員が動いて一緒に学習をやったんだと。だからそれが公民館だと思っていた。ところが建物ができると部屋はないけれど来てくれという話になっていき、だんだんと逆に公民館らしくなくなっていったという話をされていたのですが、そのことについてはどう思いますか。

(Yさん) 僕が市民課にいる頃ですね。

(聞き手) 時間がずれていますね。この公民館も施設的にはたくさん部屋があったわけではないですね。

(Yさん) 2階に部屋が二つ。1階は館長室ということで建てただけだけど、この半分くらいの部屋で、ちょっとした会合をした。僕はそれを直した。閲覧室と図書室。

(聞き手) では、自由に使える部屋は3つぐらいしかなかった。

(Yさん) 1階にもうひとつあったのが郷土資料室。

(聞き手) どうしてそう中途半端なものを建てたのか。つまり、士別では公民館の施設というのをどのように理解していたのか。

(Yさん) 人間だと思っているのではないか。

(聞き手) それはYさん自身もそう思っているのか。

(Yさん) 思っていた。

(聞き手) 施設はどうでもいいと思っていたのか。

(Yさん) いや、施設がないと困る。だから完全に怒った。図書館を放り出すからと。

(聞き手) (前略) 係長で行った2年間の時のエピソードはありますか。

(Yさん) 図書館と時々ガタガタやりましたね。運営費は全部公民館ですから。

(聞き手) 公民館の図書室という位置づけですか。

(Yさん) 公民館の施設ですから、全部。ですから閲覧室もいつ国の監査が入ってもいいように大会議室というように表示していた。

(聞き手) これ(北都新聞)には2年間係長でいた時の話は出てきませんね。あまり思い出はないですか。

(Yさん) なんかやったかなあ。2年間の間にできたのは九十九大学(注・モデル高齢者学級)です。どこかに書いてあると思うが、豊田館長が北海道で二カ所指定を受けて一緒になってこの時ばかりは公民館も協力してやった。(後略)

(聞き手) 44年に公民館に係長で行った時は視聴覚もなければ社会教育課も別のところにあった。完全に公民館の事業だけをやってた。その事業の大きなものが九十九大学であり、

青年移動研修だったんですね。

（Yさん）本来、僕が公民館長になった時は青年研修や婦人研修にしても公民館主催でやったものです。その当時は教育委員会主催でした。ですから、青年研修を中学校でやったり体育館でやったり全部教育委員会がメインです。

（聞き手）でも、担当したのは公民館の職員ですよ。

（Yさん）いや、そういう研修は担当しないです。いよいよ館長としては切なかったのでは。

（聞き手）では、何をやったのですか。九十九大学だけですか。

（Yさん）九十九大学はずっと後半ですから。合併してから……

（聞き手）いえ昭和45年から。その時は九十九大学以外には公民館で何をやってきましたか。

（Yさん）青年の移動研修とかね。

（聞き手）これは公民館の事業ですか。

（Yさん）そうです。

（聞き手）それを聞いていたのですが。これは完全な公民館事業ですね。

（Yさん）青年移動研修というのをはずして士別市青年移動研修。農家もいれば町もいる。

（聞き手）この公民館の建物を使って二つの事業が中心だった。

（Yさん）まあ、九十九大学もそこで普通はやりました。合同学習の時は場所がないのでこっちでやりましたが。

（聞き手）こっちというのは。

（Yさん）市民会館。

（聞き手）この公民館の時も市民会館を使っていたんですか。

（Yさん）そうです。大きな事業は市民会館でないと収容できませんから。

（聞き手）その時には市民会館の館長は別にいたのですね。

（Yさん）市民会館の館長は助役。

（聞き手）職員もいたんですね。教育委員会の所轄の施設ではないですからね。

（Yさん）国民年金市民会館ですから。国民年金補助の。

（聞き手）イメージ的にいうとこの2年間はそれほど印象に残っていないような気がするのですが。

（Yさん）そうですね。青年キャンプや子ども会のキャンプもやりました。青年移動研修。婦人会はしょっちゅう出入りしていたから学習会はよくやっていました。婦人主導で。当然公民館も一枚加わっていますけど。

j) 環境衛生課時代―「最高の学習機会」 昭和47(1972)年7月～昭和57(1982)年11月

その後、Yさんは昭和46(1971)年4月20日に市民課に異動となり、昭和47(1972)年7月1日には環境衛生課に降格して異動となった。

その時の降格での異動について、Yさんは以下のように記している。

市長選挙が執行され、地区労傘下の市職労もちろん地区労決定に基づき行動した。案の定、地区労推薦候補は大敗し、市職労委員長を筆頭に役員、それに応援した管理職や目立った者は8名降格となった。小生は、役員でもなければ管理職でもなかったが、「あれは青年指導者だから叩いておけ」と、後援会からの強い声があり、衛生係への降格配転となったが、私にとって、最高の学習の機会が与えられた。

(1990年10月13日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」20より)

そして、その「最高の学習機会」について、具体的には以下のように記している。

社会教育関係の職場で永年仕事をさせていただいたおかげで、グループワークがそのまま役にたった。

(1990年10月18日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」22より)

士別市は健康都市宣言をするに当たり、諸種の検討がなされた中で、議会でも岩手県沢内村のシステムなどが質問に出たり、市議会や保健婦も視察に行ったりしていた。自分の健康は自分で守れと言って守れるシステムが必要なのである。52年の議会で、保健婦の活動はもとより保健センターを建設し、各医院や病院との情報のオンライン化を図る等市長から答弁がなされたが、(後略)

(1990年10月20日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」23より)

この時代について、Yさんは以下のように語っている。

(聞き手) それが1年ちょっとで衛生課のほうに移動になる。選挙のあとですね。逆にここで10年近くいたことが勉強になった。最高の学習とはまさに社会教育と保健衛生との連携をやったわけですね。すごいおもしろい。

(Yさん) そう、せっかくやるのだから全部あそべるものに。医者が必要だから保健センターでやりましたが。ものすごい人気なんです。士別の西でおれにしゃべらすんだったら医師会やめると言う人が一人だけいましたが、あとは全員いい話してくれました。やっぱり大学の話と医療の実践派ですから現場の話をいろいろしてくれたり。

(聞き手) 衛生課の課長だったんですね。10年たって課長になったってすごいですね。

(Yさん) 10年でなったのではなく5年でなった。8月に係で行ったのが翌年の3月に係長に戻して、1年経って課長補佐、それから2年経って課長。

(聞き手) すごいスピードですね。その速さ不思議な気がします。

(Yさん) 格下げになった時に課長になった連中がなんか白い目で見ていたけどね、こっちはそんなこと関係なしに言いたいこと言うし。

(聞き手) 学びというのが必要で、社会教育と連携しているのがよくわかるんですが、普通の一般の課長さんだったら気がつかなかったり、そんなこと関係ないということになりますよね。これは公民館や社会教育で培ったことなのか、それともYさんの型破り行政職員としての発想

か。それはどっちなんだろうかね。

（Yさん） 両方です。グループワークは社会教育ですし、それと僕のアイデンティティでしょうかね。

（聞き手） 相手は嫌がる話でしょうし。

（Yさん） レントゲン技師や保健婦は普通の課長が命令しても動きませんから。それが一丸とになってやってくれたのはグループワークのおかげです。

（聞き手） その時はまた次に公民館とか社会教育に行くと思ってやっていたわけではないですよ。今まで自分がやりたいこと、積み上げてきたことをやるんだと思ってやってきたわけですね。（後略）

（聞き手） そうするとこの10年間というのはそれまでのこととは全然前と違う場所だったんだけど、逆にいうとそこで培ったものも含めて人間関係を作れたということですよ。

（Yさん） そう、最高のね。

（聞き手） そのことによっていろんなことができたということですね。

k) 士別市中央公民館長として 昭和57（1982）年11月～平成元（1989）年6月

この間、図書館から追い出される形で昭和54（1979）年7月から中央公民館は、市民会館内に併置されていた。そのような中、昭和57（1982）年11月20日、Yさんは中央公民館長として異動（教育委員会次長職）したのだった。しかし、当初は前館長が「参事」として同じ事務室いたという。

その時のことをYさんは、以下のように語っている。

（聞き手） では、中央公民館長になられた昭和57年11月からを。これは急に回ってきたんですか。

（Yさん） 前の館長は私が温根別にいた時に私の上司だった人です。

（聞き手） 温根別の公民館を作られた方ですね。その方がやめられたのですか。

（Yさん） やめてないです。半年間任期があるにもかかわらず、教育委員会の部長クラスは全部参事にしてしまった。

（聞き手） 意味がわかりませんが、参事にしたとは。

（Yさん） 参事ということは全部仕事をはずしちゃった。

（聞き手） 部長とかという称号をはずしたということですか。

（Yさん） 定年の調整でやった。本庁の部長クラスは部長で残っていた。それで僕が怒って公民館長は部長職だから、（自分は）課長職でいいんだから公民館の次長にしてくれと。いやあ、話ついているからいいんだよと、僕は辞令をもらった。結局、仕事ないのに僕のそばにいますよ。そうすると新聞社あたりが面白がって変なこといつてくる。彼が8カ月間だけ一緒にいてお辞めになる時、公民館の職員だけで市民会館で送別会をやり、記念品をいろいろ買って差し上げたんですよ。いや、こういうことは2度とやるべきではないな。お互いに気を使っ

てたいへんだったな。

また、公民館が市民会館に併置していることについて、Yさんは以下のように語っている。
(Yさん) 教職員は毎年変わるでしょ。その時教育委員会で我々が出て自己紹介させられる。「市民会館長、館なし公民館長 Yです。」とやると教育委員会で嫌がられる。そこで自己紹介をさせないで「中央公民館長のYさんです」と言うので、「ん長のYです」とかやるから「あんたのミットには参ったな」と先生方には笑われた。

そのことに対しては、以下のように記している。

発令になりますと何かやらねばと思ったのが事務室が狭隘であるのに増して、市民相談室という、鉄のカーテンならぬ鉄の壁で仕切りどうにか8人が膝を付き合わせてやっと腰が掛けられる程度のところ。(中略) 教育長や建設部と話し現在の様に玄関を半分として、お客様や内部打ち合わせが出来るようにした。(中略) 会館が出来た当時から見れば、行政当局で使用しているのが3階の雪の間、2階の第1、第2会議室である。ホールで多人数の出演者のある行事の場合は3階の会議室を楽屋にしなければならず、ましてや公民館事業、市の会議ということになると市民が気軽に利用できる部屋はもうない。

(1990年10月25日付北都新聞「わが公民館人生に悔い無し」25より)

中央公民館長を退職する直前の地元新聞には、中央公民館長としてのYさんの業績について、以下のように紹介している。

中央公民館長時代には、時代のニーズに沿って民意の向上に力を注いだため、市民の教養を高める一般的各種講座はもちろん、マイプラン・マイスタディ事業、高齢者の士別市九十九大学、市民大学企画委員会、士別市青年自主企画事業、しべつかまくら村、市民手づくり創作構成舞台など、市民の自主性を柱とする各種事業へのバックアップを惜しまなかった。そのため、それらの事業は活動の盛り上がりを見せ、異業種、異年代間の交流、研鑽の場として拡がり、市の活性化にも大きな役割を果たすようになっていく。

(1989年6月28日付北都新聞より)

また、そのころのことを、Yさんは以下のように語っている。

(Yさん) だいたい事業費をつけたのは僕がここにきてから。(中略)58年の春に予算をがらっと組み替えた。士別市の財政が一番落ち込む時なのに両方削られたらどうなるんだと市に言われたけれど、なんとでもとりますと言って、市民大学や九十九大学の教育委員会からハンコをもらってきたものを全部公民館の事業費につけた。

こうして、平成元(1989)年6月30日にYさんは中央公民館長を退職(定年)したのである。

その後、平成8(1996)年10月1日、士別市市民文化センターが市民会館隣に新設され、中

中央公民館が併置された。（その2）で前述したように、結局士別市中央公民館は単独の独立した施設を持たないまま現在に至ったのである。

②ライフヒストリーから見えてくる士別市の公民館史

ここでは、Yさんという公民館職員だった人のライフヒストリーから、平成元（1989）年頃までの士別市の公民館史を眺めてきた。したがって、そこには文献資料等からは見えてこない発見がある。

たとえば、戦後直後の初期公民館が温根別ではどのように誕生していったのか、当時の人々のリアルな息づかいとして見えてくる。中学校よりも公民館が優先されたこと。そしてYさんが、役場職員でありながら公民館職員（嘱託書記）を兼務したのは、青年会長を務めていたからであり、村内各地区で青年団活動が活発になるとともに、ナトコ映写機を担いで各地で映画会を開催して歩いたこと。

また、「昭和の大合併」で誕生した士別市では、「事業としての公民館」が優先され、「施設としての公民館」が軽視されてきた。そして、一方では児童館や青年の家等、領域別の新しい社会教育施設が建設されている。この児童館・青年の家が設置された時期は、昭和40年代初めであり、士別市の人口が最大時（昭和36年）から減少しはじめた時期であった。そのような中で、当時の市長によって政治的（「上川管内で一ヶ所だけ」「知事から金を貰って青年の家を建てさせている」等）に設置されたのであり、同時期の中央公民館は図書館に軒下を貸して母屋を乗っ取られていくのであった。

さらに、士別市では市長選挙の度にいわゆる「報復人事」が行われていたという。Yさんも、そのことで降格させられた経験を持っていた。しかし、その結果Yさんが「最高の学習機会」を衛生課勤務で得たのも事実であった。そのことが、最後に中央公民館長となったYさんの館長としての仕事に生かされていったのである。

このように士別市では、戦後直後からの公民館の歴史を守り、現在に地区館一分館という公民館体制を継承しつつも、実は公民館というものをその時々市長や政治的な思惑、担当者の理解ややる気などに左右されながら、紆余曲折して継続させてきたといえるだろう。

(8) 残された課題

本稿では、士別市における公民館のあゆみを形成期から現在まで概観してきた。

士別市は、「昭和の大合併」においては1町3か村が合併し、「平成の大合併」でも1市1町が合併するという自治体の拡大・広域化を経ながらも、地区館一分館という公民館体制を現在まで維持してきており、今日の「縮小社会」においてもこの公民館体制を「強化」する中でその持続可能な発展を展望していることが明らかになった。

しかし、筆者はこのように維持継承してきた「地区館一分館という公民館体制」について、疑問と警鐘を鳴らさなければならないと考える。

それは、Yさんのライフヒストリーからも明らかになったように、士別市では中央公民館(士別市の中心市街地にあり、旧・士別町エリアの地区公民館でもある)が単独ではなく、他の施設との併設で存在してきており、「集める公民館活動」はもちろん、「集まる公民館活動」が成立して来なかったのだ。そして、その代わりに分館活動と「走る公民館」による事業を中心とした公民館活動が活発に展開されてきたのであり、月に20回以上の巡回映画会を行ったというYさんら当時の職員の「公民館魂」がそれを支えてきた。しかし、人口減による学校統廃合など、今日の縮小する地域社会においては、分館の廃止や担い手不足による分館活動自体の低迷・縮小が進んでおり、そのような分館活動を支援できる体制が今こそ中央公民館・地区館に求められているのであるが、実際には中央公民館・地区館の機能(職員数や専門性)すら縮小してしまっているのである。

にもかかわらず、北海道内でこのような公民館体制が成立し、現在も続いている自治体は極めて珍しい。そして、平成21(2009)年2月の「士別市教育行政執行方針」には「分館活動の強化」等、公民館活動の拡充が謳われていたのである³⁾。

したがって、士別市の今後の課題は、上記「公民館活動の拡充」をどのように進めていけるかであろう。しかし、一方で「分館活動の強化」と言いながら、実は平成22(2010)年には中央公民館の川西・西士別・北町の分館を廃止している。確かに人口が減少し高齢化する中で、担い手がいなくなれば分館廃止もしかたないかもしれない。だが、そもそも今後どのような「地区館一分館という公民館体制」を再編成していくのか、明確な方向性が示されなければ、結局「縮小社会」がさらに進展していけば、結果として分館をすべて廃止して行くことになってしまうのではないかと危惧せざるを得ない。

先に士別市では「集まる公民館活動」が成立して来なかったと述べたが、筆者は分館活動が培ってきた「事業としての公民館」を、分館がすべて廃止になった時点も見越して、今から旧町村単位の地区公民館に「集まる」形で引き継いでいけないだろうかと考えている。そのためには、中央公民館の単独施設化と公民館職員体制の整備が不可欠であり、市としての明確な新しい公民館施策が求められるのである。

以下、(その4)に続く

- 5, ケーススタディ3 (八雲町)
- 6, ケーススタディ4 (置戸町)
- 7, 地域社会の持続可能な発展と公民館
- 8, おわりに

3) 詳しくは、前掲拙稿 p 133 を参照。

表9 Yさんと士別市公民館のあゆみ

年	Y氏のあゆみ	公民館・住民・地域・市（旧町村を含む）の動き	道・国の動き
昭和20(1945)	昭和6年4月1日 剣淵村で誕生。昭和18年に温根別村へ転居。	士別町・上士別村・多寄村・温根別村	9月 「新日本建設の方針」 10月 「日本教育制度に関する管理政策」(GHQ)
昭和21(1946)	*体が弱く、何もせず家にいた。		3月 第一次アメリカ教育使節団報告書 5月 文部次官通牒「都道府県並びに市町村社会教育委員設置について」 7月 文部次官通牒「公民館の設置運営について」(「寺中構想」) 8月 教育刷新委員会設置 8月21日 「公民館の設置運営に関する件」道庁教育・民政・内務・経済の各部長名で支庁・市町村へ通知 11月 日本国憲法公布
昭和22(1947)	3月4日 温根別郵便局保険係 *青年団に入会	10月1日 士別町公民館設置・開館	3月 教育基本法・学校教育法公布 4月 地方自治法公布
昭和23(1948)	11月1日 温根別村役場へ就職。農林統計係	2月11日 多寄村公民館開館 7月1日 温根別村公民館設置 —9月11日開館式	3月 青年学校廃止 4月 文部省「社会学級」委嘱開始 7月 教育委員会法公布 11月 北海道教育委員会発足
昭和24(1949)	*青年団が解散となり、新生青年会に入り2代目会長となる。 4月1日 温根別村公民館兼務 *ナトコ映写機を持ち、月20回村内巡回	8月20日 上士別村から朝日村が分村（上士別村7,556人・朝日村5,543人） 9月1日 温根別村公民館白山分館・北温分館・仲線分館設置	1月 教育公務員特例法公布 3月 北海道教育委員会『公民館のあゆみ』 6月 社会教育法公布 北海道教育委員会、公民館設置への助成策を進める 8月 市町村立公民館設置補助規則（北海道教育委員会）
昭和25(1950)		3月31日 士別町公民館中士別分館設置 人口 士別町(20,880人)・上士別村(7,588人)・多寄村(4,422人)・温根別村(4,464人)	4月 図書館法の公布 5月 文化財保護法の公布 8月 市町村立公民館設置補助金規則（北海道教育委員会） 9月 第二次アメリカ教育使節団報告書 12月 地方公務員法発布
昭和26(1951)		3月1日 士別町公民館下士別分館設置 4月1日 士別町公民館川西分館設置 8月31日 上士別村公民館設置（9月13日 開館） 9月13日 上士別村公民館川南分館・成美分館・三郷分館・南沢分館・大和分館設置 9月30日 同大英分館設置	5月 日本青年団協議会結成 6月 社会教育法一部改正 9月 講和条約・日米安保条約調印 「走る公民館の実施について」(北海道教育委員会社会教育部) 12月 博物館法公布
昭和27(1952)	11月1日 温根別村教育委員会発足し、公民館担当の兼務となる。	11月1日 士別町・多寄村・上士別村・温根別村・朝日村教育委員会発足	○北海道公民館連絡協議会（現・北海道公民館協会）発足

年	Y氏のあゆみ	公民館・住民・地域・市（旧町村を含む）の動き	道・国の動き
昭和 28(1953)			8月 青年学級振興法公布
昭和 29(1954)	7月1日 合併により士別市教育委員会社会教育係となり士別市公民館中央分館に勤務。	4月1日 温根別村公民館伊文分館・北静川分館設置 6月4日 朝日村公民館設置 —6月8日 村内6小学校に分館設置 7月1日 士別市誕生により、士別市公民館—中央分館（士別町公民館）・上士別中央分館（上士別村公民館）・多寄中央分館（多寄村公民館）・温根別中央分館（温根別村公民館）となる。 10月15日 武徳分館・南士別分館・西士別分館（旧・士別町内）設置 7月1日 士別市（士別町・上士別村・多寄村・温根別村4町村合併）誕生 人口39,191人	6月 教育二法公布
昭和 30(1955)	旧営林署跡に教育委員会移転（視聴覚ライブラリー担当）	10月 士別・下士別分館が下士別小学校内に地区からの寄付で分館を新築	○静岡県稲取町，山梨県柏村実験社会学級
昭和 31(1956)			6月 「地方教育行政の組織および運営に関する法律」公布
昭和 32(1957)	ケガで入院（2月13日～3月31日）	4月1日 各地区館に専任館長を置き，士別市中央公民館・士別市上士別公民館・士別市多寄公民館・士別市温根別公民館となる。	
昭和 33(1958)	4月1日 士別市立図書館主任	4月1日 多寄公民館中多寄分館設置 12月22日 士別・中士別分館を中士別7線東2青年研修所に併置	
昭和 34(1959)	4月1日 市役所税務課		4月 社会教育法大改正 12月 公民館設置及び運営に関する基準」について告示
昭和 35(1960)	* 税務普及映画会開催で各学校を回る	4月1日 多寄公民館東陽分館設置 4月18日 温根別公民館湖南分館設置	1月 新安保条約調印 9月 池田内閣「高度成長・所得倍增政策」発表
昭和 36(1961)		士別市人口 41,218人（最大）	10月 全国の中学で一斉学力調査 6月 スポーツ振興法公布
昭和 37(1962)		1月1日 朝日町制施行 人口6,484人	
昭和 38(1963)	4月1日 市民課		1月 経済審議会「経済発展における人的能力開発の課題と対策」答申
昭和 39(1964)	* ボランティアサークルで活躍		4月 全国の市町村で家庭教育学級開設（文部省補助） 10月 東京オリンピック
昭和 40(1965)		国勢調査人口 士別市 36,502人 朝日町 6,141人	

「縮小社会」における地域社会の持続可能な発展に関する一考察（その3）

年	Y氏のあゆみ	公民館・住民・地域・市（旧町村を含む）の動き	道・国の動き
昭和 41(1966)	4月1日 福祉事務所へ異動 12月 児童館へ異動 25日開館し指導員となる。	6月30日 士別市中央公民館新築(図書館併設) 8月14日 下士別分館が下士別42線の独立館新築(老人クラブ・季節保育所併設) 12月25日 児童館開館	
昭和 42(1967)			
昭和 43(1968)	5月21日 市立つくも青少年の家に係長として異動。10月に開館。	3月31日 多寄・東陽小学校廃校一旧校舎利用独立分館に 4月 中央公民館に「走る公民館やまびこ号」が配置され、分館への移動公民館を実施。～昭和52年度まで実施 10月 つくも青年の家開館	○全公連「公民館のあるべき姿と今日の指標」発表
昭和 44(1969)	8月1日 市立中央公民館に業務兼庶務係長として異動。	3月31日 上士別・三郷・川南・大和小学校廃校一旧校舎利用独立分館に 10月18日 上士別出張所新築と併せて上士別公民館が一部転用	
昭和 45(1970)		3月31日 士別・南士別小学校、上士別・南沢・大英各小学校廃校一旧校舎利用独立分館に。温根別公民館北静川分館・湖南分館廃止一小学校廃校に伴い 国勢調査人口 士別市 33,044人 朝日町 5,101人	
昭和 46(1971)	4月20日 市民課に異動。	9月3日 上士別公民館新築(老人クラブ併設) 9月5日 上士別・川南分館独立館新築	○社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」
昭和 47(1972)	8月1日 環境衛生課に降格して異動。	3月31日 士別・川西小学校廃校一旧校舎利用独立分館に	
昭和 48(1973)	3月 環境衛生課係長	3月31日 温根別・仲線小学校廃校一旧校舎利用独立分館に	
昭和 49(1974)	4月 環境衛生課課長補佐	3月31日 温根別公民館伊文分館廃止一小学校廃校に伴い	○社会教育審議会建議「在学青少年に対する社会教育のあり方」 ○社会教育審議会答申「市町村における社会教育指導者の充実強化のための施策について」
昭和 50(1975)		9月27日 士別・南士別分館独立館新築(老人クラブ併設) 11月29日 温根別公民館が生活改善センター新築と併せて一部転用 国勢調査人口 士別市 30,028人 朝日町 3,713人	
昭和 51(1976)	4月 環境衛生課課長		
昭和 52(1977)			
昭和 53(1978)		4月1日 中央公民館南町分館・北町分館設置	
昭和 54(1979)		7月 市民会館内に中央公民館を併置	

年	Y氏のあゆみ	公民館・住民・地域・市（旧町村を含む）の動き	道・国の動き
昭和 55(1980)		国勢調査人口 士別市 28,970人 朝日町 3,133人	
昭和 56(1981)			○中央審議会答申「生涯教育について」
昭和 57(1982)	11月20日 市立中央公民館長に異動（教育委員会次長職）		
昭和 58(1983)			
昭和 59(1984)			
昭和 60(1985)		国勢調査人口 士別市 27,719人 朝日町 2,740人	○臨時教育審議会第1次答申「生涯学習体系への移行」
昭和 61(1986)			
昭和 62(1987)			○臨時教育審議会第4次（最終）答申
昭和 63(1988)			○文部省に生涯学習局設置
平成元(1989)	6月30日 中央公民館長退職（定年）。		
平成 2(1990)		国勢調査人口 士別市 25,754人 朝日町 2,408人	○中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」 ○「生涯学習振興整備法」公布
平成 3(1991)			○中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」
平成 4(1992)			○生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」
平成 5(1993)			
平成 6(1994)		4月1日 朝日町サンライズホール（朝日町公民館）開館	
平成 7(1995)		国勢調査人口 士別市 24,293人 朝日町 2,110人	
平成 8(1996)		10月1日 市民文化センター開館 —中央公民館併置	○生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」
平成 9(1997)		4月1日 中央公民館南町分館廃止	
平成 10(1998)			○生涯学習審議会答申「社会の変化に対応した今後の社会教育行政の在り方について」 ○特定非営利活動促進法（NPO法）制定
平成 11(1999)			○生涯学習審議会答申「学習の成果を幅広く生かす—生涯学習の成果を生かすための方策について—」 ○社会教育法改正（地方分権一括法案に関する改正）
平成 12(2000)		国勢調査人口 士別市 23,065人 朝日町 1,926人	
平成 13(2001)			○社会教育法改正（教育改革国民会議報告を受けた改正）

「縮小社会」における地域社会の持続可能な発展に関する一考察（その3）

年	Y氏のあゆみ	公民館・住民・地域・市（旧町村を含む）の動き	道・国の動き
平成 14(2002)			
平成 15(2003)			○「公民館の設置及び運営に関する基準」改正 ○中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」
平成 16(2004)			
平成 17(2005)		9月1日 合併に伴い士別市朝日公民館設置及び朝日公民館壬子分館・三栄分館・登和里分館・茂志利分館設置 9月1日 士別市と朝日町が合併し、新・士別市が誕生 国勢調査人口 士別市 23,411人	
平成 18(2006)			○改正教育基本法公布
平成 19(2007)			
平成 20(2008)		4月1日現在の公民館体制 ・中央公民館—中士別・下士別・武徳・川西・南士別・西士別・北町の各分館 ・上士別公民館—川南・兼内・大和・成美の各分館 ・多寄公民館—中多寄分館 ・温根別公民館—白山・北温の各分館 ・朝日公民館—壬子・三栄・茂志利・登和里の各分館	
平成 21(2009)			
平成 22(2010)		3月31日 中央公民館川西・西士別・北町の各分館を廃止 国勢調査人口 士別市 21,797人	
平成 23(2011)			

*資料に基づき筆者作成